

令和 4 年 5 月 22 日現在

機関番号：32653

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2021

課題番号：18K15400

研究課題名（和文）アジア高地在住高齢者におけるうつ病発症に抑止的に働く因子の医療人類学的検討

研究課題名（英文）Medical Anthropological Study on Factors that Reduce the Onset of Depression in Elderly People Living in the Asian Highlands

研究代表者

石川 元直（Ishikawa, Motonao）

東京女子医科大学・医学部・非常勤講師

研究者番号：20529929

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究ではヒマラヤ高地のラダック地方において、宗教観やソーシャルキャピタル、幸福度、性格特性などがうつ病の発症にどう影響しているのか明らかにするために文化的背景まで踏み込んで調査を行った。敬虔なチベット仏教徒であるという精神的支えや家族やコミュニティにおける社会的つながりが、うつ病の発症や経過に良好な影響を与えていた。ラダック高地在住高齢者でうつ病が少ないことには、個人の性格特性が与える影響以上に、良好なソーシャルキャピタルが影響していると考えられる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究を通して、ラダックの高齢者のうつ病の発症や経過には、身体的、心理的、経済的要因以外にも、チベット仏教などの宗教的要因やソーシャルキャピタルという社会的要因が大きく関与していることが明らかとなった。障害に対する解釈は文化間で異なり、治療関係や治療満足度に影響を与え、介入によって変えうることも示されており、障害へのアプローチを考える際に重要である。西洋医学的治療を絶対視せず、ソーシャルキャピタルを醸成し、地域に生きて来た知識を応用する努力も必要であろう。

研究成果の概要（英文）：In this study, we investigated the cultural background to clarify how religious beliefs, social capital, happiness, and personality traits affect the onset of depression in the Ladakh region of the Himalayan highlands. Spiritual support of being a devout Tibetan Buddhist and social ties within the family and community had a positive impact on the onset and course of depression. The low prevalence of depression among the elderly living in the Ladakh highlands may be due to good social capital more than to the influence of individual personality traits.

研究分野：医療人類学 心療内科

キーワード：うつ病 ソーシャルキャピタル 医療人類学 高齢者 ヒマラヤ高地 ラダック 高地住民 フィールド医学

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

私たちは2008年からヒマラヤやアンデスにおいて生活様式の変化がいかに老人の well-being に影響を及ぼしているかを、医学、地理学、農学、人類学、気象学、生態学など様々な角度から解明してきた。それまで標高と自殺率には強い正の相関があり、標高とうつ病にも相関がある可能性が指摘されていたが、私たちはそれまで報告のなかったラダック地方のうつ病の有病率について、高齢者には少ない可能性を報告した。また、ラダックで発生した自然災害後には、うつ病や外傷後ストレス障害 (PTSD) の発症頻度が低いということも報告した。敬虔なチベット仏教徒であるという精神的支えとあいまって、家族やコミュニティにおける社会的つながりの高さが保たれているために、自立度が低下したり、災害で家屋を失ったりした高齢者に対しても、QOL が高く保たれる社会のしくみが機能していることが、結果の背景にあると考えられた。しかし住民の主観的幸福度、ソーシャルサポートや信仰心が非常に強いため、うつ状態との関連を統計学的には示せなかった。

近年、地域社会を考えていく際に、住民間のネットワーク、信頼関係と互酬性の規範の共有といった社会関係であるソーシャルキャピタルという考え方が注目されている。そこで本研究では社会文化的背景まで踏み込み、うつ病の発症に抑止的に働く要因を明らかにすることによって、自殺者の多くを占める日本の高齢者うつ病の発症予防に生かせるのではないかと考え、この研究を発案するに至った。

2. 研究の目的

インド・ラダック地方ドムカル村に住む高齢者に対してうつ病に関する医療人類学的な調査を行い、ソーシャルキャピタルとうつ病との関連を研究する。

3. 研究の方法

本研究は10年前からの長期縦断研究の実績を有するラダック地方ドムカル村(標高3000~3800m)を拠点とした。住民の参加率を高めるため住民健診では生活習慣病に焦点を当て、身長・体重測定、血圧測定、血液検査による糖尿病や脂質異常症のチェックを行いつつ、うつ症状や宗教に対する信仰心、ソーシャルサポート、性格特性に対する質問紙表を用いてアンケートを実施した。また、全員に仮想的なうつ病症例を提示して、うつ病に対する説明モデルを調査した。

用いた指標は以下の通りである。

- ・うつ症状:PHQ-9(Patient Healthcare Questionnaire-9)とGDS(Geriatric Depression Scale)
- ・信仰心の指標:Religious Commitment Inventory-10(RCI-10)
- ・ソーシャルサポートの指標:Multidimensional Scale of Perceived Social Support(MSPSS)
- ・幸福度の指標:Visual analog scale(VAS)
- ・性格特性の評価:Ten Item Personality Inventory(TIPI)
- ・うつ病の説明モデル:Semi-structured Explanatory Model(SEMI)

さらに前年度までに実施した現地調査をふまえて、過去にうつ病と診断した住民を一人ひとり訪問し、うつ病の経過などについて詳細な聞き取り調査を行った。

4. 研究成果

2018年8月、2019年8月とラダック地方ドムカル村を訪問し、40歳以上の現地住民に対して健診を行った。身長・体重測定、血圧測定、血液検査による糖尿病や脂質異常症のチェックを行い、宗教に対する信仰心やソーシャルサポート、性格特性、ソーシャルキャピタルに対するアンケートを実施した。また、前年度までに実施した現地調査をふまえて、過去にうつ病と診断した住民を一人ひとり訪問し、うつ病の経過などについて詳細な聞き取り調査を行った。ほとんどのうつ病患者は家族との死別が誘因であり、西洋医学的な介入をせずとも自然に寛解していた。うつ病の経過には、社会的要因以外にも、spiritualな要因、とくにチベット仏教などの宗教的要因が大きく関連し、地域共同体とそれを結ぶ宗教的ネットワークが大きな比重を占めていることが明らかとなった。

Semi-structured Explanatory Model Interview(SEMI)を用いたうつ病に対する説明モデル

を調査では、既報のチベット、台湾、日本での結果と比較し、異なる文化圏におけるうつ病の説明モデルの違いを明らかにした。ラダックではうつ病について医学的対処が必要であると考えられる住民は少なく、問題は社会的な要因で起こるという認識が多く、対処法もお祈りをするなど医療以外のものが多かった。カルマという回答もあり、個人の資質を超えた諦念・受容という考え方が存在しているようであった。

Patient Health Questionnaire-9(PHQ-9)で6点以上をうつ状態ありと定義し、うつ状態なしの群と主観的健康観やソーシャルキャピタルの指標について比較検討を行ったところ、うつ病が少ないことには良好なソーシャルキャピタルが影響していることがわかった。家族や地域の結びつきや信仰心などの文化的要因がうつ病の発症に抑止的に働いている可能性が示唆されたが、ソーシャルサポートや信仰心が非常に強いいため、うつ状態との関連性を統計学的に見いだせずにいた。そこでビッグファイブ理論に基づく簡易性格検査である Ten-Item Personality Inventory(TIPI)を用いて、うつ病が少ない論拠はどこにあるかを明らかにすべく調査を行ったところ、外向性が高いほど、神経症傾向が高いほどうつが少ない傾向がみられた。

2018年8月にラダック同様の高地であり、チベット人など少数民族が多く暮らす中国青海省を訪問した。青海大学医学部付属病院で高齢者うつ病患者を実際に診察し、青海大学の医師と高齢者のうつ病について意見交換を行った。12月には東京に青海大学の医師を招聘し、中国との比較を通して日本の在宅医療や高齢者医療について知見を深めた。2019年にも同様に相互の訪問が実現した。人々はその地で生まれ、既存の医療システムのなかで疾病とむきあい、やがて老いていく。中国では今後、日本以上のスピードで高齢化社会に突入していくと予想されており、地域社会に根差した医療サービスを提供するために今回の経験が一助になると期待される。

2020年度、2021年度も現地調査を行う予定であったが、新型コロナウイルス感染症の蔓延により、中止せざるを得なかった。そのため、これまでの研究成果をまとめ総合的に考察する期間とした。ラダックの高齢者の性格特性は外向性が高いほど、神経症傾向が高いほどうつになりやすい傾向がみられ、うつに関連因子として、年齢、婚姻状態、居住形態、ADL、主観的幸福度、外向性が抽出された。うつ病が少ないことを個人の性格特性から説明することを試みたが、多変量解析の結果、ラダック高地在住高齢者でうつ病が少ないことには、個人の性格特性が寄与する割合は大きくないと考えられた。多くの先行研究で、ソーシャルキャピタルと良好な主観的健康観、精神的健康との間に有意な関連があることが明らかにされている。本研究でも、うつ状態は「地域への愛着」、「手段的サポートの受容」、「地区組織への参加」、「地域のイベントへの参加」、「地域の美化活動への参加」と相関がみられた。ラダック高地在住高齢者でうつ病が少ないことには、個人の性格特性が与える影響以上に、良好なソーシャルキャピタルが影響していると考えられる。家族や地域の結びつきという点では日本は近年後退しており、むしろラダックの伝統社会のなかにその存在を見出すことができる。

本研究を通して、ラダックの高齢者のうつ病の発症や経過には、身体的、心理的、経済的要因以外にも、チベット仏教などの宗教的要因やソーシャルキャピタルという社会的要因が大きく関与していることが明らかとなった。障害に対する解釈は文化間で異なり、治療関係や治療満足度に影響を与え、介入によって変えうることも示されており、障害へのアプローチを考える際に重要である。西洋医学的治療を絶対視せず、ソーシャルキャピタルを醸成し、地域に生きて来た知識を応用する努力も必要であろう。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 Motonoao Ishikawa, Gaku Yamanaka, Masakazu Takaoka, Ayana Sakurai, Tomoko Ogasawara, Shoko Marshall, Hiroshi Sakura	4. 巻 8
2. 論文標題 Seven-Year Outcome of Two Cases of Depression in Elderly High-Altitude Residents in Ladakh, India	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Journal of depression & anxiety	6. 最初と最後の頁 1-6
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 石川元直, 山中学, 高岡正和, 小笠原知子, 佐倉宏	4. 巻 59
2. 論文標題 心身医学とフィールド医学 生態学的視点から健康長寿を探る ヒマラヤ・ラダック高所在住高齢者のうつ病 「幸せな老い」について考える ヒマラヤ・ラダック高所在住高齢者のうつ病	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 心身医学	6. 最初と最後の頁 315-320
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計11件（うち招待講演 2件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 石川元直
2. 発表標題 多忙な大学病院勤務医がどのように海外フィールドワークに出かけているのか
3. 学会等名 第26回多文化間精神医学会学術総会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Motonoao Ishikawa, Gaku Yamanaka, Tomoko Ogasawara, Ayana Sakurai, Shoko Marshall, Hiroshi Sakura
2. 発表標題 An Explanatory model for depression in Ladakh, India: A Comparative study using Semi-structured Explanatory Model Interview
3. 学会等名 the 11th IAGG Asia/Oceania Regional Congress 2019（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Ishikawa Motonao, Yamanaka Gaku, Tomoko Ogasawara, Sakurai Ayana, Kizuki Aki, Marshall Shoko, Sakura Hiroshi
2. 発表標題 Community Social Capital and Depression Among Elderly Highlanders in Ladakh, India
3. 学会等名 15th EuGMS Congress (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 石川元直, 山中学, 小笠原知子, 櫻井彩奈, 木附亜紀, 杉浦美恵子, マーシャル祥子, 佐倉宏
2. 発表標題 ラダック高地在住高齢者においてうつ病に抑止的に働く因子の検討
3. 学会等名 第61回日本老年医学会学術集会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 石川元直, 山中学, 小笠原知子, 櫻井彩奈, 濱崎樹里亜, 野原春菜, 今井必生, 佐倉宏
2. 発表標題 ヒマラヤ・ラダック地方でうつ病はどのように解釈されるか～Semi-structured Explanatory Model Interviewを用いた比較研究～
3. 学会等名 第38回日本社会精神医学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 石川元直
2. 発表標題 ヒマラヤ・ラダック高所在住高齢者のうつ病～「幸せな老い」について考える～
3. 学会等名 第59回日本心身医学会総会ならびに学術講演会(招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 奥宮 清人, 坂本 龍太, 石本 恭子, 木村 友美, 藤澤 道子, 和田 泰三, 石根 昌幸, 石川 元直, 大塚 邦明, 松林 公蔵
2. 発表標題 チベット高地住民における耐糖能異常の脆弱性 老化と生活変化による低酸素適応のトレードオフの可能性
3. 学会等名 第61回日本老年医学会学術集会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 石川元直, 山中学, 小笠原知子, 櫻井彩奈, 野原春菜, 木附亜紀, 杉浦美恵子, マーシャル祥子, 佐倉宏
2. 発表標題 ラダック高地在住高齢者においてうつ病に抑制的に働く因子の検討 ~ソーシャル・キャピタルの視点から~
3. 学会等名 第62回日本老年医学会学術集会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 太田由衣, 石川元直, 安井佑, 佐倉宏
2. 発表標題 医学生が看取りの現場を経験して感じたこと~在宅医療と病院を比較して~
3. 学会等名 第7回日本プライマリ・ケア連合学会関東甲信越ブロック地方会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 石川元直, 山中学, 山本唯, 中嶋俊, 高根祐希, 佐倉宏, 小笠原清香, 安井佑, 王紅心, 代青湘
2. 発表標題 「中国青海大学との国際交流の取り組みについて」東京女子医大東医療センターからの報告
3. 学会等名 第9回日本プライマリケア連合学会学術大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 石川 元直, 山中 学, 小笠原 知子, 桜井 彩奈, 佐倉 宏
2. 発表標題 ラダック高地地域住民におけるうつ病と性格特性の関連 ~Ten-Item Personality Inventoryを用いて~
3. 学会等名 第62回日本心身医学会総会 ならびに学術講演会
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計2件

国際研究集会 青海大学医学部附属病院講演会 認知症と高齢者診療	開催年 2018年～2018年
国際研究集会 青海大学医学部附属病院講演会 高齢者とソーシャルキャピタルについて	開催年 2019年～2019年

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関